
僕と彼女の同性生活

近江駆琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の同性生活

【Zコード】

N2807R

【作者名】

近江駆琉

【あらすじ】

高校3年生の1月。受験戦争真っただ中の私『優紀』は思いもよらない人生の岐路に立つた。平凡に毎日を過ごしてきた私に起つた大事件。でも、これもきっと私という人生においては当然で当たり前のはず。さあ、一歩踏み出そう。平凡な私の日常へ　＊シリアスクコメディの軽いタッチです。

プロローグ（前書き）

「」注意

この小説は『両性具有』について主題では「」ざいませんが扱つておられます。難しい分野ですので、あくまでフィクションである事を最初に示させていただきます。全ての事象において、非科学的・非医学的な見地です。

それらについて、何らかの意見を投するもの、批判や中傷、軽視するような気持ち、意味は一切ありません。

また、何度も言いますがフィクションですので、非現実的な都合のよい設定、展開があります。「」を承ください。

以上の内容を踏まえ、この小説の扱う内容について批判・中傷はなし、という方のみ、本編へ「」進みください。

お願いたします。

プロローグ

「いつてらっしゃい、 優紀

「いつてさまーす

いつもと同じ時間に、いつもと同じセリフで、いつものように母親に見送られて私は家を出た。

桐谷優紀^{キリヤユウキ}、高校3年生。

彼氏いない歴=年齢の、どこでもいる女子高生だ。

まだまだ人生これからで、楽しいこと、悲しいこと、嬉しいこと、嫌なこと…

とにかく毎日が新しい事でいっぱい、そして、それが当然だった。

受験勉強に辟易して、死にたくなつて。

月9のドラマみたいな恋に憧れて。

いわゆる親にいらいらして。

友達とカラオケで盛り上がりつて。

そして、急にそんな自分が馬鹿らしくなる。

そして、自分という存在の小ささや、人の優しさを学んでいく。

誰もが通るこの道を、私はこの日も一歩前に進むはばで、まさか大きく別の道に踏み出すなんて、思ってもみなかつた。

ふわふわの栗色の髪が3つ前の席で前後に揺れている。今日は火曜日だから、きっと昨夜は遅くまでお気に入りのテレビを見ていたのだろう。あてられないといいけれど。

そう思いながら彼女と同じ色に染めた髪に指を絡ませた。彼女の髪の色は白毛、私の髪は生まれつきの猫つ毛。少しづつ相手に合わせて、「二卵生双生児みたいにしよう」と彼女が提案して染めたのだ。双子は冗談だろうけど、兄弟のいない私にとって、その提案はすぐうれしいものだった。

(あ、寝た。って、先生見てるし)

ぐらぐらしていた頭がすとん、と落ちたまま上がつてこなくなつた。それと同時に先生が彼女を視界にとらえた、が、そのまま話を続けた。まあ、年明けの3年生の授業はみんなが受験で必死だから、寝ている生徒に構つていてる暇なんてないんだろう。

「美野里、さつき寝てたでしょ？先生絶対に気付いてたよ

「うわあ、ばれた？あ、それ！！」

私の親友、オオカワミノリ大川美野里は授業の終わりを告げるチャイムではつと頭をあげた。眠たげに眼をこすっている彼女の机に近づいて声をかけ

ると、まずいなあ、という表情でおどけて見せる。しかし、それも一瞬で、私が持っているノートを見つけると「ありがとーー！優紀、大好きっ」と花が咲くように笑う。その笑顔はすごく可愛くて、思わず今まで微笑んでしまつ。

いや、外見を言つてしまえば、私も彼女もいわゆる十人並みだ。それでも、私は彼女の素直な所がすごく好きだった。

「それ、明日まで借りていいかな？優紀のノート見やすいから、じっくり家で見たいんだ。明日朝一で返すから」

「どーぞ。汚さないでね？」

私は家で勉強するときにノートは見ないから全然構わない。それでもノートをとるのは、それが好きだから。丁寧に文字を書いて、カラーペンでポイントとかを工夫して書く。そうして出来上がった私のノートはあたかも雑誌の一ページ見たいになつて、なんだか満足するのだ。そして、彼女がそれを喜んでくれるから。

だから貸すのはいいのだけど、美野里はながら作業が大好きなのだ。勉強しながらの夜食は当たり前。流石に飲食物の汚れは気になる。

「大丈夫！－ちゃんと気をつけるから」

「お、ちょうどいいところに。それ、俺にも貸してくれよ」

「あつーーーうよつと、東ーーー」

美野里にノートを渡そうとした私の後ろから、ひょいと手が伸びてきて、彼女に渡るはずだったノートは視界から消えてしまった。

165cmある私から、そんな事ができる男子なんて、一人しか思
い当たらない。クラスメイトの香西東一カサイトウイチだ。

「いりあ……優紀のノート、返しなさいよ……私が借りるんだから
っ」

「お前は家でうつすんだろ。だつたら放課後までに返せばいいじゃ
ん? いやー、今日俺遅刻しちまつてさ、今ガツコ来たんだよ。いい
よな、優紀?」

153cmという小さめな美野里は180cmの東一を、きつと見
上げて大きな声をだした。ここで無駄だとわかりながら手を伸ばさ
ない彼女の頭の良さと、男に媚びない態度（意識しているのか知ら
ないけれど）も、私が彼女を好きな理由の一つ。

東一はそんな美野里を簡単にあしらって、最後の一言で私に許可を
取つた。朝が弱いらしい彼は、こうしてよくノートを借りに来る。
私としては別に構わないでの領くと、東一は「サンキュー、今度また
お礼するから」と言いながら私の頭をぽん、となでて颯爽と席に戻
つて行つた。

そう言えば、東一は律儀にもノートを貸す度に、チヨコなどのちょ
つとしたお菓子をくれる。ただ、それらは甘いものが得意でない私

に代わって、美野里のお腹に収まるのだが。

「もー、ちゃんと放課後までに渡してくれるかなあ…」

「ダメなら東一の家に取りに行けばいいじゃない」

美野里と東一はお隣さんで、家族同士で仲がいいらしい。ちなみに、東一が美野里にこうして絡むのは、きっと彼が彼女が好きだからに違いない。だって、東一が受ける大学は私と美野里が受ける大学と近いし。

二人が付き合って幸せになつて欲しい、とは思うけれど、東一に美野里を取られてしまふ気がするのも嘘じやない。複雑だ。

始まりは唐突で

そんなほのぼのとした日常を過ぎて、いた私の身体に異変が起きたのは、今日の最後の授業中だった。お昼くらいからなんだか食欲がなくて、だるくなってきて、風邪っぽいかなとは思っていた。けれど、それはどんどん悪化して今は座っているのに視界がくらくらするし、おまけに吐き気までする。

保健室に行きたいけれど、声を出すことも辛くてとにかく目を閉じてやり過ごすしかない。

(気持ち悪い……どうしよう……)

運悪く私の席は教室の一一番後ろ、しかも隣の席の子は今日は欠席している。誰にも助けを求められずに、私はこらえるしかなかつた。

「先生、桐谷が具合悪いんで保健室に連れて行きます」

「え…、優紀！？大丈夫？」

「顔色が良くないな。大川、香西、ついてついてやりなさい」

そんな私に、東一が気付いて席を立つた。それにつられて美野里も来てくれる。助かった、と思い立ちあがむとするが、うまく身体に力が入らない。

「立てないのか？美野里、優紀の荷物まとめて持つてこい」

「へ、うん。お母さんにも連絡するね」

周囲の声がだんだん遠くから聞こえてきて、ふわりと身体が浮いた。東一に抱きかかえられたのだ。それを恥ずかしがる余裕もなく、私は苦しそうに耐えるのだった。

真実への道のり・1

「うーん。」

目を覚ました私の視界に飛び込んで来たのは、見たことのない場所だった。いや、正確に言えば知っているが見たことのない場所。

白い天井に白いカーテン。寝心地のよいとは言えないベッドと布団。独特の消毒液の匂い。そう、病院だ。私はどこかの病院の個室にいるらしい。

…というか、いつから私は眠ってしまったんだろう。

今日は火曜日で、学校に行つて授業を受けていた。最後の授業で具合が悪くなつて、東一が保健室まで運んでくれて…？

いや、教室を出たあたりから記憶がない。私は眠つていたのではなく、具合が悪くて気を失つたのだ。東一や美野里に迷惑をかけてしまった。

「あら、起きたのね。体調はどう？」

静かにドアが開き看護婦さんが入つてくると、彼女は身体を起こして、私を見て声をかけると、すぐに点滴や血圧をチェックし始めた。

「ちょっと気持ちが悪いけど、大したことありません

「よかつた。もう少ししたら先生と『両親がいらっしゃるから、横になつてね』

時計を見ると、針は夜の9時を指していた。それなりに長い間、私は眠っていたようだ。そのためか、点滴のためか体調はだいぶ良くなつていて、いろいろなことが気になりだした。

「あの、私はいつ頃運ばれてきたんですか？」

「ああ、そうよね。あなたは学校で倒れて、すぐに救急車で運ばれてきたの」

看護婦さんの言葉に私は驚いた。まさか救急車を呼ばれるような状態だったとは思わなかつたし、これが初めての救急車経験だったから。

「私、どこか悪いんですか！？」

「『』めんなさい、私は何も聞いていないの」

本当はそんなわけない。誤魔化すように苦笑いをして看護婦さんはすぐに病室を出て行つてしまつた。

不安で胸が締めつけられるみたいに痛い。でも、ただの風邪や貧血だと思っていたのに…

揺れる瞳をじまかすよいつに、私は横になり布団をかぶった。

「え……私が、男……？」

「いいえ、優紀さんは両性具有です。つまり、男でも女でもあるんです」

しばらくして両親と、白衣を着た優しそうな先生がやってきて私はドキドキしながら身を起こした。両親の表情は硬い。やっぱりどこか悪いんだ。

そして、とうとう呼ばれたのは思ってもみない病名だった。

「答えにぐいかもしだせませんが、最近生理はありましたか？」

「い、いいえ……でも、もともと不順なので」

「では、生理痛は重い方ではありますか？」

「はい。田口よつては学校に行けないこともあります」

先生はカルテではなく、しっかりと私と田口を合わせて、気遣いながら質問をしてくれる。でも、信じられなかつた。私には全然そう言った知識は無かつたし、どうしてそんなことを聞くのかもわからなかつた。

「…大変、申し上げにくいのですが。検査の結果、あなたは子どもを産むことができません」

「…………え…？」

「「「めんね、優紀つ…お母さんがもつと早く気付いてあげれば…」

衝撃だった。まだ、私は18歳の高校生なのに。呆然とする私を母が泣きながら抱きしめ、その母の肩に父が手を置いている。あまりに受験勉強一色だった私の生活とかけ離れた展開に、頭も心もついていけずにフリーズする。

それから、先生は丁寧にゆっくりと私の置かれた状況を説明してくれた。

医学的な詳しい説明は敢えてここではしないけれど、私の生理の悩みは両性具有が原因であり、もつと早くに受診すれば子供を産めなくなることはなかったらしい。

だから、母は泣いていたのだ。

内診とかになつたら、と思うと恥ずかしくて、病院に行きたがらなかつた私を無理にでも連れていけばよかつた。

「「「今までわかりましたか？」

「…はい。大丈夫です」

「顔色がよくないですね。体調はどうですか？少し休みましょう」

「いえ、あの…大丈夫ですから続けてください。ちゃんと全部聞かないと、不安なんです」

相変わらず優しい先生が気を遣つてくれたのはわかつたけど、私の頭の中には、私が両性具有で子供が産めなくて、卵巣や子宮を摘出しなければならない事へのショックより、まだまだあるだろう聞いていない事への不安だった。

子供を産めないなんて、今の私にはなんの実感もなかつたし、今の世の中子供を産む事だけが幸せじゃない。

頭のどこかで冷静な私がそう提案している。いつの間にか私は思春期を終えていたんだな、とまで考えていた。

「それもそうですね。実は、ここからが本題なんです。優紀さんは、女性として自分の子供を持つ事はできませんが、男性としては可能なんです」

「え…えつ？…ええええーー！」

あまりの驚きに開いた口が塞がらないし、夜9時の病院には決して相応しくない大声を私は出してしまった。

まさに『ポカーン』といつ効果音がぴったりだ。

「う、うつそお…それって、ほ、本当ですか！？先生つ！…」

「はい、本当です。優紀さんは適切な手術をすれば一般の男性として生きていく事ができます」

まさか、私が男の子として…その、そういう行為ができるだなんて思えなくて、私は先生を見た。

今さらだが、胸元のネームプレートには鈴木、と書かれているのに気づいた。

そして鈴木先生はなぜか安心したようにうつりと笑って、爆弾発言をしたのだ。

「もちろん、法律の上でも男性になります。これから優紀さんがしなければならない事は、自分の状況を落ち着いてしっかりと理解すること。そして、これからどちらの性別で暮らしていくか決める」とです

まさに、青天の霹靂とはこれをいうのだ。つい。辞書を引きながら受

験生の私がわからないうつな諺を誰がいつ使つんだ、と懶く思つたが、まんざら無駄じやなかつたらしい。

鈴木先生は、私の頭がぐちゃぐちゃになつてこるのを察して、「詳しい話はまた明日にしましょ」¹⁴と黙つて病室から出ていく。

「……めんね、優紀。お母さん、ちゃんとあなたを産んであげれなかつたから……」

「それは違つよ、お母さん。私は、つまべ言えないけど……『ああ、自分の人生はこうなんだ』って思つてる。悲觀して諦めてるんじやなくて、これも私の人生だつて思えるつていつか……」

そうなのだ。確かにすこく驚いているし、不安でもある。多分私は今年の春の大学入学を諦めないとけないだろうし、もしかしたらお金の問題で大学自体に行けないかもしれない。

もつともつと先のことを考へると……

あんまり問題ないかもしねない。

ふと、そんな考えが浮かんだ。もつと両親に言つたら怒られると思うけど、現実的かつ客観的に考へると、私の田指す将来に『子供がいる幸せな家庭』はあつたけど、そこに『妊娠・出産』は無かつた。いや、むしろ矛盾しているけれど自分が『お母さん』になることさえ考へていなかつた気がする。

考えれば考えるほど、今の自分の置かれている状況はそう深刻ではない、と思えてきた。

「お母さん、お父さん。私は大丈夫だから、あんまり心配しないで。もつ遅いし、私も疲れちゃったから、いろいろ難しい話は明日しよう？」

私以上に憔悴している両親に、これ以上心労をかけたくないで、私は一人に家に帰つてもらつた。母は「病室に泊まつていいく」と言ってきかなかつたのだが、父が「お前が無理をしてどうするんだ」と連れて帰つてくれた。

静かになつた病室で私は怒涛の一日を思い出す。いつものように家を出て、いつものように授業を受けたり、美野里達と他愛もない話をしても…

そして、人生初めての救急車を経験し、自分が両性具有で子供を産めない身体だと告げられ、男として生きていけると告げられた。

普通だつたら取りみだしそうな状況なのに、自分でも驚くほど私は冷静に全てを受け入れられていた。それはきっと、私は恋をしたことがないから。誰かを好きになつて、その人に女の子として大切にされたい、愛したい。そういう気持ちを持つたことがないのだ。もちろん、それなりに恋愛に憧れはあるし、ドラマを見ればドキドキもする。でも、それらは所詮想像の中のことと、現実の生活の中で感じることは無かつた。

無理に探して言つなら、美野里と出かけている時はそつまつ気持ち

に近かつたかもしれない。私が男の子だつたら、転びそうになつた時にかつこよく支えてあげられるのに、とか、遅くなつたら送つてあげられるのに、とか。これがデートだつたらもつといろいろ美野里をよろこばせられるかな、とかね。

(…私、男の子になりたかつた?)

いや、そんなことはない。もちろん、女である自分に不自由を感じたり、男の子の生活に興味を持つたりもしたけれど、それは誰でも一度は異性に対して思う感情であつて、強い欲望として感じたことは無かつた。それに、好きまでは思わなかつたけれど、中学校の時は憧れている男の先輩だつていた。

こうして自分のアイデンティティやルーツを考えるつむこ、夜は更けていった。

そして、明け方になつて眠りについた私の頭には、一つの答えがしつかりと出ていたのだ。

「「え…えつ?…ええええーーー!」

「しーーー美野里、東ー、静かにつ

私と同じ驚き方をした一人に、私は焦つて注意した。学校が終わつて、すぐにお見舞に来てくれたので時間は早いが、ここは病院。騒ぐのは厳禁だ。

「「」、」めん。でも…え?ビーッ!」と?」

「なんでそつなるんだよーー優紀、昨日の今日だぞ、もつとよく考えて…」

「考えたわ。考えて、考えて、先生に相談して、両親を説得して、それでも私の考えは変わらなかつたの」

私が一晩よく考えて出した答え、それは『男として生きていく』ことだつた。絶対に反対するだらう両親を説得するために、まずは朝の回診に来た鈴木先生に相談することにした。

先生は私の言葉に頷いて、午前中いっぽいを使ってこれから女の子として生きていく場合と、男の子として生きていく場合の治療方法や、一般的な両性具有の知識をみつちりと教えてくれた。もとの性別そのまま生きていくが大多数で、性別を変えた人もすぐ苦労して

いるらしい。その上で「それでも、男性として生きてこきますか?」と尋ねられた。

女性から男性になるのは、身体以上に精神的・社会的な面で苦労するらしい。それでも私の答えは変わらなかつた。

その後、両親に病室に入つてきてもらい、私は意氣込んで「男として生きてこきたい」と正直に告げた。反対されることは当然だつたから、ちゃんと説得する準備もできていた。けれど…

「そうか。優紀がそうしていなら、私たちは反対しないよ。お父さん」「できる」とがあればなんでも聞いてくれ

「昨日あれからお父さんと相談してね、優紀がどんな答えを出して、絶対に応援しようつて決めたのよ」

両親はそう、なにも言わずに私の答えを受け入れてくれた。そして午後は今後の事を話し合つて、今に至る。

まさか、初反対が東一だとは思わなかつた。

「どうしたんだよ。その…別に子供が産めなくたつて、優紀は優紀だろ…」

「そうね、でも別にその事で男になることを決めたんじゃないの。一人にだから率直に言つけど、私は自分の利益だけのために男になるの。すくなくゴイステイックな理由で」

「自分の利益…？エゴイストイック…？」

私がこの決断をした理由。それは自分の子供が欲しいからではなかった。ただ男として生きることが今後の自分にとって女性として生きていくことより『利益』が多かつたから。私の人生を考えた時、私は女性としてでも、男性としてでも、誰かを愛せるることは間違いなかつた。もちろんそう言つた経験のなさによる間違つた判断かもしれないけれど、今の私には両方のビジョンが明確に想像できたのだ。

でも、それも建前で、本当の理由は誰にもまだ言えなかつた。

「あのね、正直これから私の人生設計は男女どちら変わらない。大学に行つて、就職して、夢をかなえる。この過程に性別は関係ないもの。つまり、仕事において性別はイーグン。じゃあ、私生活は？これは客観的に考えて自分の子供が持てるんだから男性の方にメリットがある。…あとは金銭的、私の精神的には負担があるけれど、それは『男性としての第一の人生』という好奇心の前では負けてしまった。それだけなの」

そう、これはただのエゴだ。自分が男女どちらでもいい、という反社会的な意識から生まれる身勝手な考えなんだ。

「…そつか。難しいけど、優紀がしつかり考えて決めて事はわかつた。それなら、私は応援するから…！」

「まじかよ…俺、も…その。あのわ…」

「…東一？」

美野里が受け入れてくれたことに私はホッとした。実は彼女がもし理解してくれなかつたら、私はこのまま女性でいようと思っていたから。いろんな批判は覚悟しているけれど、親友である彼女からそう言われたら、美野里を失つたら、私は何のために男性になる必要があるだろうか。

しかし、東一は違つた。男女の違いのかもしない。なにかを言いたそうな彼からは、私の発言に対する嫌悪感や、批判的な様子は見られないけれど、やはり戸惑いから来るのだろう頑なな態度である。

「あつ、私バイト先に電話しなきやなんだ！…ちよつと、出でくる
ね」

「えー…う、うん…」

東一の態度で気まずい雰囲気の病室から美野里は出て行き、私と東一の「一入りとなつてしまつた。無理やりに認めてもらおうとは思わないけど、できれば東一にも受け入れてほしい。これからも、いい男友達…いや、今後は普通に友達というのが正しいのだ。そういう関係でいたい。

でも、そのために何て言えばいいのかがわからない。

彼と、彼女と、

「じいこ……」

「あのやい

重い空気をじうこかじよひと、とうあえず口を開いたが、東一はそれを遮った。

「やつぱり、俺は優紀に女でいてほしい」

「……」めん

「謝る」とじやねーよ。ただ、俺はさ……」

どうやら私の考えが気に入らないわけではない東一の言葉に、うつむいていた顔を上げると彼の表情は見たこともない真剣なものだった。

「優紀……俺は、お前が好きなんだ。もちろん女として、優紀が好きなんだよつーー。」

かちり、と東一と田が会つと、東一は押し殺してきた感情の爆発をそのまま私にぶつけてきた。その態度はいつも飄々としている彼か

らは想像もつかない勢いでびっくりだ。

「…え？ 東一は美野里が好きなんじゃ…」

「違う…あいつはただの幼馴染だ。なあ、この状況でこんなこと言つくな、マジに優紀が好きだ。だから、このまま女として俺の隣に居てくれよ…っ！」

思いがけない東一のセリフ。そして、溢れた思いをどうにもできなかつたのだろう。東一がベットの上で上半身を起こす私をギュッと抱きしめた。

がつしりとした、力強い腕。広く厚い胸。

ぞくり、と肌が粟だつた。

「…いや、はなして、東一…」

どん、と東一の身体を突き放し、自分の身体をぐるりと抱きしめた。

「…それが、答えか？」

「今、わかった。私は、東一の望みには絶対に答えられない」

憮然とした態度で私を見つめる東一の目を、今度こそ私はしつかりと見つめ返した。心臓がどくり、と大きく鼓動を打つた。

「私はいや、俺は女ではないみたい。東一に抱きしめたれて感じたのは、ドキドキでも、恐怖でも、嫌悪でもなかつた。悔られたような怒りと、敵愾心だつた……だから、私の東一への気持ちは友情以外にはなりえない」

「……優紀」

「『めんね、東一。東一のことはもちろん嫌いじゃないし、むしろ好きだけど……それ以前の問題だつたみたい』

抱きしめられて、なつか……自分の決意からなのかはわからないけれど。私の心は「女の子」であることを拒絶した。

東一を深く傷付けて。

「……もう、さよならかな……私たち。私はこれからも東一と男同士の友達でいたいけど、無理……だよね？」

まさか東一が私を好きだなんて思わなかつたから、本当は男になるにあたつて頼りにしようと思つていたけど……

男になつて一人でナンパとかしちやつたり、なんて想像してたけど……

東一にしてみれば、好きな子にフラれて、しかも男になってしまったのだ。

そんな私の側にはもういてくれないだろう。

関係を拒んだのは自分なのに、東一を失うとこいつ事実に胸が苦しくなつて私はうつむいた。

「お前つて意外に冷たいのな、優紀。五年の恋も冷めるくらい、見損なつたぜ」

唐突に変わつた冷たい東一の態度に、視界が歪む。

だめだ、泣いちゃ…

傷ついたのは東一で、私は彼を傷つけたんだから。

ぎゅっと唇を噛み締めて、私は溢れそうになる涙を押し殺した。

「あーあ…なんで俺、こんな酷い女に惚れてたんだ? 気の迷いだな。つてことだから、これからはまた別の形でよろしく」

「え…?」

うつむいた私の前に大きな手のひらが差し出されたて、私は顔

を上げた。

東一の顔を怖々とうかがうと、彼は優しく微笑んでいた。

「フラれたからって、優紀のことを遠ざけたりなんてしないよ。男になるなら相談相手も必要だろ?…ちょっと複雑だけどな」

「東一…つ、ありがと…」

躊躇いはあつたけど、私は無理と明るく東一の手を握って、微笑んだ。

「ちょっと待つて!…どうして1年間会わないなんていうの?東一はいいのになんで私はだめなの!…?」

東一との話が終わると、タイミングよく美野里が病室に入ってきた。きっと、彼女は東一の気持ちを知っていて、気を利かせたのだろう。

そこで、私はこれからどうするのかを具体的に話すことにした。

先生の話では、身体的に男性になるのには1年以上の年月がかかるらしい。今から施術を行えば、1年浪人すればちょうどいいくらいだ。

というわけで、私はなるべく早く手術を受けることにした。そして、来年の4月からは大学に行こうと。

そして、その1年間は美野里に会いたくないと告げたのだ。

「途中経過つて情けないしや、1年後に会つた方がサプライズでしょ？別に会わないだけでメールとか電話とかはするから。東一はなんていうか、先生？…ね、お願い、美野里」

「…………」

「卒業式には出るか？」

私の言葉に嘘は無かつた。どんな風なるかはよく分からぬけれど、途中経過を見られるのはなんだか恥ずかしかつたし、ちゃんと『男』として美野里の前に現れたかつた。

「…わかつた。でもつ、会わなくとも友達なんだからね？」

「美野里… ありがと」

私と美野里は抱き合つた。

「…ひして、私は今まで歩いてきた道から別の道に踏み出したのだ。

長い時間

「あー……やっぱー。マジでやっぱーって…」

「へへせーな、わざわざからなればつかり……覚悟決まつてるんだろ?」

「当然。でもわ、やっぱーって、ほんと」

わざわざから意味のわからない言葉を繰り返す俺に、呆れた東一が苦笑いをする。俺はそんな東一の態度を気にする余裕もなく、腕の時計に目を落とす。さつき見てから5分も進んでいない。

ちなみに待ち合わせの時間まではあと10分ちょっとだ。

「はいはい、ってか… 一時間はなんて言つかな?」

「…気付くか?」

「俺の隣に居るんだから気付くだろ。なに、最近電話とかしてなかつたのか?」

「声変わつてからはしない」

そう、今日は卒業式から一年ぶりに美野里に会うのだ。その3分の2以上を病院で過ごした俺にとって、ずいぶん濃い1年になつたけれど、大学生の1年もきっと変化に富んだ1年だつただろう。

実際、東一もこの一年でずいぶん変わった。まだ少しだけど背は伸びているし、髪もこげ茶に染めて、今着ている私服も、ずいぶんとおしゃれになつた。

「へえ、楽しみだな」

「あー…心臓やばい…」

緊張して髪に手をやつせうになつて、慌ててひつこめた。ぐしゃぐしゃの髪で会うなんて論外だ。

「あのー…ちよつとお茶しませんか?さつきからいになー、つて思つて」

何度もかの時間を確認しようとした時だった。同じ年くらいの一人組の女の子が声をかけてきた。これで3組目だ。

「「めんね。俺達人を待つてるんだ」

東一のこのセリフも3回目だ。ちらり、と東一に視線を向けると女の子の一人と目が合つた。セミロングの髪がふにゅつとしていて、1年前の美野里に少し似ていた。

そのまま田を逸らすのも失礼だと思って、にこりと笑いかけると、

ふいっと顔をそらされてしまった。まあ、いいや。

隣ではまだ東一が女の子と話しているが、今度こそ時計に視線を落とす。約束の時間の5分前だ。

「… ゆ、 優貴^{まさたか}？」

その時だった。後ろから、彼女の声が戸惑いながら俺を呼んだ。

びくつ。

動揺を隠して振り返ると、彼女がいる。

「優紀つて呼んでよ。 美野里」

1年ぶりで、ずいぶんと大人びた美野里が、そこにはいた。

詰ひなおして

「本物…優貴^{まさたか}つて改名したんだよね?」

「本物だよ。名前は変えたけど、美野里には前のまま呼んで欲しいな」

戸籍上の性別を変えた際に、俺は名前も優紀^{ゆうき}から優貴^{まさたか}に変えていた。これは事情をよく知らない人に何か言われるを避けるためと、新たな人間関係を作りやすくするためである。

「…本当に、優紀…男の子になっちゃったんだね」

「うん…なんか、はずいね? 美野里^{みのり}すく^ぐ綺麗^{きれい}になってるし」

1年ぶりの再会は思っていた以上にお互い衝撃的だった。

美野里の髪は相変わらずだつたけど、うすくされた化粧のせいかずいぶん雰囲気は変わっていて。

そのせいかなんだか変に意識してしまい会話がぎくしゃくする。

「…髪、そのままなんだね」

記憶の中より長いウエーブのかかつたその栗色の髪に手を伸ばして、指に絡めた。

「つ……！」優紀、だつて……」

「うん……美野里、どうかした？」

「や、その……手、優紀なのに驚いちやつて……」

身体を強張らせる美野里の髪から名残惜しいけど、手を離した。

そうか、もう女同士じゃないんだから気軽に抱きあつたりしたらいけないのだ。

「じめん、つい……」

「あの、別に嫌な訳じゃないからつ……」

「はいはい。二人で甘酸っぱい雰囲気だしてんなよ。俺もいるんだぞ」

なかなかスムーズにいかない俺たち一人に、東一が割つて入つてきた。

美野里を前にすっかり忘れていた。

「ま、とつあえず…寒いしどつか入らひや」

「うーん…なんだか変な感じ。優紀なんだけど、優紀じゃないみた
い」

「それはやつだろ。でも顔はいじつてないからわかつただろ?」

手頃な喫茶店に入つて座ると、美野里も落ち着いたのか徐々に前み
たいな態度になつた。

今はじ一と俺を観察してこる。

「髪が短いからかな?背も伸びたし」

「いやいや…そんなレベルじゃねーだろ」

「やうだよー!むしろ顔のパーツと髪の色以外は全部変わつちやつ
て…東一と並ぶと威圧感有りすぎー!」

あつと美野里は身長のこととを言つてこるのである。

高背の父親に似てもともと高かつた身長は150㌢ほど伸びて、今は180㌢はある。

「本当は待ち合わせの15分前には一人を見つけてたんだけど…優紀じゃないと思つてたの」

「んー、自分じゃあんまり変わった感じないんだけど」

東一が言つたように、中身は手を入れたけど外見は特になにもしていないのだから。

「仕草とか変えたからじゃん？」

「そうかも。歩き方も、ちょっとした所作も全然女の子っぽくないのね？」

「俺のおかげだな。一緒に住んでよかつたろ？」

美野里の言葉に東一が満足そうに俺に笑いかけた…と同時に隣のテーブルに座っていた女の子たちが「いやああ、本物見つけちゃった…！」と囁くのが聞こえてきた。

「…………えつと、愛は性別を越え」

「ないから

「俺の場合は」

もちろん美野里も本気じゃないだしけど、一いつはまつさせねばならない。

「美野里は氣づいてなかつたけど、しばらく東一の家で男らしく生活を泊まつこみで勉強させてもらつてたんだよ」

「嘘つ……全然気がつかなかつた……」

手術と同時に俺は東一からいろいろな事を勉強していた。

特に苦労したのが仕草だ。

ちょっとでも女の子らしこ仕草があると、あつちの人みたいのが嫌で徹底的に直したのだ。

「本当に田の前にいるのがもと女の子なんて信じられないよ。優紀、綺麗な顔してると、細身で背が高いからモデルみたいね」

「あれ、美野里に言つてないのかよ。優紀、実際モデルしてるぞ」

「東一、勝手にいろいろ美野里に言つなつて……」

放つておいたら聞かせたくないことまで言いそうな東一を、俺が睨んで黙らせた。モデルの事はあまり知られなくなかったのに。

「えー……モ_デルしてる優紀見たい……いまこのままでかっこいいんだもん、雑誌とかのかっこつけてる優紀はいい男って感じでしょ！！」

「いや……俺、別にかっこよくはないから。探したりするなよ？」

とりあえず笑って誤魔化そうと、にっこりと美野里に笑いかけると彼女はぴたりと口を閉ざしてうつむいたのだった。

「うーーー私、ちゃんと大学で優紀のこと守つてあげられるか不安になってきた……」

「まあ、慣れる。こいつマジで天然だから」

俯いたまま、ぼそつと零した美野里のセリフに、東一が答えるけれど、一体何のことだろうか。美野里に守られるような状況ってわけでもないし、俺は天然じやない。

わからぬ事はとりあえず置いておき、二人に言わなければならぬ事があつたのを思い出した。

「あのさ、大学なんだけど…俺、おくみや奥宮大経営学部に受かつたから」

「え……えつ？……ええええ————！」

「大声出すなつて！！」

驚くのは無理もないのだけど。やつさんの美野里の発言からして、きっと去年目指していた大学をそのまま受けると思っていたんだろうから。

去年の俺は美野里と同じ私立大学を狙っていた。ちなみに美野里は

そこに受かり、東一はすぐその近くの別の私立大学に通つてゐる。

しかし、俺には予想外に1年という時間ができた事に加え、手術だなんだと親に負担をかけてしまつた。父親は一応エリートというやつで、お金の心配はしなくていいといわれたけれど、俺はせめて学費の安い国立大に行こうと決めたのだ。まあ、他にもいろいろ理由はあるけれど。

そしてせっかくなら1ランク上の大学を目指そうと、結構真面目に勉強した結果がこれだ。

「お前、いつの間に勉強したんだよ……」この一年それビヨンじやなかつたろ!?」「

「東一のいない時にしてたんだよ。どうせ術後はベッドの上ですることなかつたし」

「……優紀、この1年一体何してたの?ちょっとずつ聞いてると訳わからんないよ」

東一の言うとおり、性転換のための治療は今も続いており、生半可なものではなかつた。細胞一つ一つが無理やり作り替えられるような苦しさもあつたし、精神的にも慣れないことばかりだった。

それでも時間的にも、金銭的にも恵まれていたと思つ。

「何つて……治療と勉強とバイトと、あと車とバイクの免許取つたく

らいで大したことしてないよ」

「まあ、いろいろ活動できたのは最近だよな。やっぱり大きな手術の後はずいぶん苦しんでたし。泣いたりしてたよなー」

「はい、覚えてないからー。東一のうやじやない?」

辛かつた話なんてしたくない。もう、終わつた話だから。

「まあ、そう言つわけだから。俺はバイクで通うからあんまり会えないからさ、美野里、遊ぶ時は声かけてよ。つて、一人じゃ彼氏に怒られるか」

「か、彼氏なんていないから大丈夫!! 一緒に大学に行けるの樂しみにしてたんだから、その分たくさん遊んでもらうからねつ」

「そつか、良かつた。つと、ごめん。ちよつと着信だから…」

ちよつとわざとらしいかな、と思つたけれど、作戦は上々だつた。美野里に恋人がいたらなかなか会えないだろつから、気になつていたのだ。

だからと言つて、男になつた今「彼氏いるの?」なんて、聞くのもなんだか嫌だつたのだ。しかも、俺と一緒に良かつた、みたいな事まで言つてくれた。

浮かれた気持ちを隠して、バイト先からの電話に出るために俺は席

を立つのだった。

「…東一。私、変じやなかつた?」

「別に普通に見えたけど。わつさまでは」

優紀の背中が見えなくなると、私はテーブルに突つ伏した。あれは卑怯だ、不意打ち過ぎる。もんもんとする感情を抑えきれずに私はバタバタと地団駄を踏んでみた。

「何? 優紀に惚れたか? 女は現金だなー」

「ちょっとーー変なこと言わないでーー優希は私の大切な友達なんだから。でも、あんないい男になるなんて、卑怯でしょ……きゅんきゅんするーーっ!!」

卒業式以来、約1年ぶりに優紀に会えると、今日の私は張り切つて家を出た。春の陽気に誘われて選んだ白のニットワンピースにピンクを基調とした大判ストール。足元もブーツは卒業してちょっと高めのヒールのパンプス。もちろん時間は待ち切れずに30分も余裕を持った。

男子になつた優紀なんて想像できないからドキドキしながら電車の中で想像した。きっと、最近デビューしたジャニーズの子たちみたいに可愛いだろうな。

東一も一緒に居るはずだから、あの無用な身長のおかげですぐに見つかるはずだ。そう思つて、待ち合わせに指定された大学の最寄り駅の改札を出ると、前を歩いていた女子高生らしき一人組が何を見つけたのか、小さく歓声を上げた。

「ちょっと、見てみて！…あそこには立つてゐる一人、超かっこよくな
い？」

「え？ うわあ、ほんとだ！…やっぱ、マジでかっこいい！…一人と
も背高いし、おしゃれー！…」

きやつきやと盛り上がる一人に意識が向いていたが、よくよく見れば他にも多くの女性が駅の出口付近にいるらしい男性一人組の話で盛り上がっているようだ。

…ちょっと見てみたいな。

血縁じやないけど、大学に入ったのに今まで浮いた話がない私。かつこじい男には興味くらいあつてもいいはずだ。ちょっとだけ胸を踊らせて東一を探すふりをして噂のもとへと目を向けた。

そこには確かに一人の背の高い男の子がいた…が、片方の壁にもたれて立つている方は東一だ。残念すぎる。

もとはと言えば、帰りが遅くなる飲み会とかに私のお母さんに頼まれたからって、東一が迎えに来たせいで私は勝手に彼氏持ちに分類されてしまったのだ。だから合コンにも誘われない。

そんな東一は放つておいて、私はその隣で姿勢よく立っている方に目を向けた。身長は東一と同じくらいで、カーキのアシメジヤケットに細身のパンツというスタイルは春らしい。徐々に細部を見ていくと、髪は私と同じ栗色。そして顔は…

……？

どこかで見たことがあるような気がして私は目を凝らすのに、彼は私の視線に気付くことなく髪に手を伸ばして顔を隠してしまった。

その上、二人組の女の子が東一に声をかけたせいで彼の姿は見えなくなる。その子たちも見たことある…と思つたら、それは私の同級生だ。私の彼氏（と思われてる）男に声をかけるとはなかなか大胆だなあ…

そんなことを考えながら、彼女達に気がつかれたら気がまずいので、私は東一に背中を向けてきつといれから来るのだろう優紀を…

……！？

そこで私は思い出した。最初の女子高生は「一人組」と言つていたではないか。そして見たことのある顔だと思つたけれど、あれは。

慌てて振り向く。そこに合つたのは「一」「一」と馬鹿みたいに女の子と話をする東一と、その隣で女の子には目もくれず腕時計に目を落としている彼　優紀だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2807r/>

僕と彼女の同性生活

2011年3月19日14時41分発行